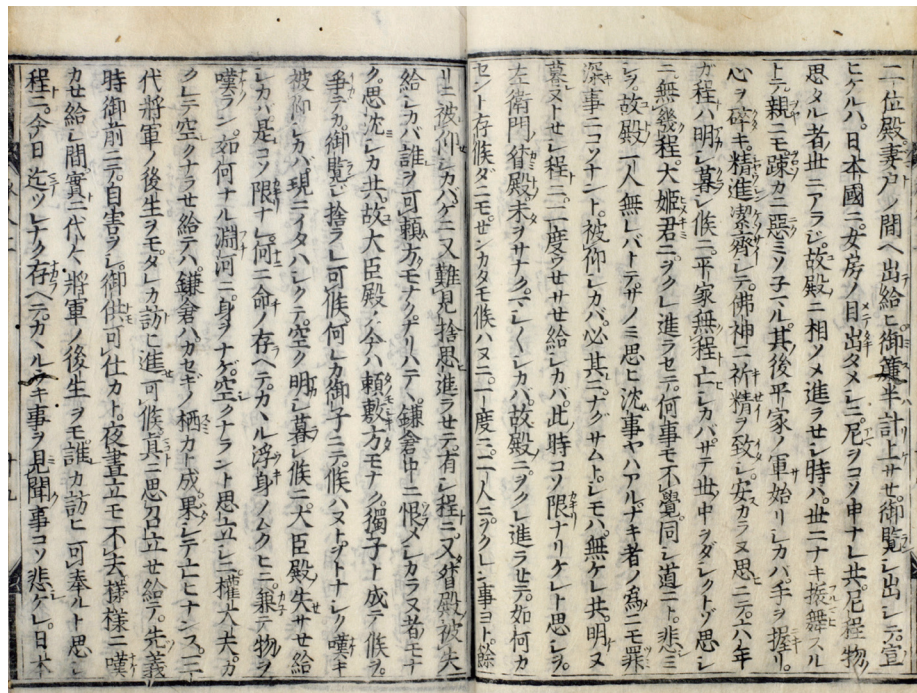


執権政治（承久の乱）



* 石川卓美文庫261「承久記」の北条政子の演説の部分

解説

「承久記」は、1221（承久3）年に後鳥羽上皇の挙兵によって起こされた承久の乱を記した合戦記です。たくさんの異本がありますが、もっとも古いとされる慈光寺本の成立は鎌倉中期ころと推定されており、教科書等でよく目にする「北条政子の演説」を載せる「吾妻鏡」の成立と時期的にはさほどかわりません。そして、この「承久記」にも、「北条政子の演説」が記されています。

写真は、当館蔵の「承久記」（近世初頭に刊行された古活字本）に載せる北条政子の演説の部分です。一番右の行から、二位殿（北条政子）が大姫君（娘）や故殿（夫・源頼朝）らに先立たれた悲哀と頼朝の御恩を滔々（とうとう）と説き、軍勢に向かって去就を明らかにせよと迫るくだりは迫力満点です。

「吾妻鏡」の書きぶりとは微妙に異なりますが、上皇の挙兵をうけた源氏の軍勢の緊迫した様子がよく伝わってきます。

* 「承久記」は活字になっており、岩波書店の『新日本古典文学大系43』（岩波書店、1992年）にも古活字本、慈光寺本が収録されています。